

### ■ 浦郷昭子さん（建設部門/建設環境） 「女性技術士の会の意義」

世には多くの学術系団体があります。医学、文学、農学、工学など、国内だけでも数えきれないほどの団体があり、それぞれの団体が専門知識を共有し、高め、新たな発見や考え方によって、よりよい世界づくりを目指しています。その中で女性技術士の会というのは女性が中心という横串によって多分野の専門家の集まる団体であり、女性の地位向上だけでなく学際的な団体であることに大きな意義があると思います。この学際的側面の持つ意義について考えてみました。



専門分野を扱う学会は、同じ分野の同じような価値観を持った人が集まっているので、課題認識や目指すべき方向性に関する共感を得やすいものです。話も合うし、相互理解や知見も深まり、居心地が良いため、集団はどんどんクローズドになっていく傾向にあります。集団がクローズドになると、集団の常識が他の常識とかけ離れてしまっていることや、他の集団の持っている価値観や知見が存在することを忘れてしまいがちです。自分は環境アセスメントという仕事をしているため、事業者、行政、土木専門家、環境専門家、環境 NGO、地域住民と関わり、これらの人々が各々のクローズド集団の中で「自分が正しく他者は間違っている」という考えから抜け出せず、対立の構図のままともな合意形成ができない状態に多く立ち会ってきました。この場合、力の強いものの意見が通り、土地を持たない人や人以外の生き物の意見は計画の最終段階に形ばかりの配慮を頂けるとというのが実情です。

SDGs では多方面の目標を掲げていますが、人を含む全ての生物にとって 100%正しいと思える計画や開発行為は存在しません。ある人にとって正しい計画であっても、別の人や生き物にとっての都合は悪くなるという事態は往々にしておこります。SDGs を目指すには、他者の視点を理解し、全員が少しずつ妥協しながら、全員が受け入れられる合意点を時間をかけて見つけていく必要があるのです。「ある点から見ると自分は〇〇にとって正しく、ある点から見ると他者も〇〇にとって正しい」「ある点から見ると自分は間違っており、ある点から見ると他者も間違っている」ただそれだけのことですが「自分はある点で間違っていたかもしれない」という考えを受け入れられる人はなかなかいません。クローズド集団の中で自分に似た考えの人とばかり会話をしていると、自分だけが完全に正しく他の価値観や他の視点を「間違っている」「意味がない」と切り捨て、受け入れられなくなってしまうのです。クローズド集団の思考から抜け出し、自らの思考に多様性を持たせるには、専門外の知見を積極的に取り入れ、できるだけ自分と異なる集団と会話し、議論することです。

日本人は「相手の気分を害することを言うべきではない」といった文化があるうえ、積極的に議論することに慣れていません。論理的に受け取るべきところを感情的に受け取り、自分が批判された、否定されたと感じて議論を避け、思考を停止する傾向にあります。人の考えが変わるような指摘は、時に受け入れがたいような感情を引き起こす可能性があります。高等教育を受けた知識人たるものそこで感情に引きずられるべきではありません。相手が何を言っているのか、なぜ自分が過剰に反応してしまうのか、自分と相手のどこに視点や優先順位の違いがあるのかを冷静に分析し、相手に欠けている視点や自分に欠けている視点を探すべきなのです。「自分のこの部分が間違っていたかもしれない」と気づくことは、過去の自分を否定することではなく、自分の視野が広がったと祝福すべき瞬間なのです。自らの思考や視点の欠落に気づけるようになった時、合意形成のテーブルに着き、SDGs の議論に参加する資格が得られます。あなたの視点は人間だけの視点ではないでしょうか。日本人だけの視点ではないでしょうか、行政だけの視点ではないでしょうか、〇〇屋だけの視点ではないでしょうか。女性技術士の会の強みは、「女性」だけでなく、様々な分野の専門性をもった人間が集まっているというところにもあります。この学際的な集団の強みを生かし、多くの議論をし、クローズド化した所属集団の活性化につなげていこうではありませんか。